関連学会印象記

第34回日本移植学会総会

深尾　立*

第34回日本移植学会総会は平成10年11月30日，東京京王プラザホテルを会場として，会長：東京女子医科大学小柳仁教授の，日本および先生ご自身の臓器移植研究の歴史を背景に，心臓移植を待つ患者と移植医療の発展への想いを込めた感動的な開会のご挨拶から始まった．例年よりも２ヶ月遅い総会であったが，日本国民の懸案であったいわゆる脳死移植を認める臓器移植法が施行されてから１年目の移植学会であり，従来２日間であった学術集会プログラムを，今回は12月２日までの３日間とされたのも小柳会長の力の入れ方を物語っている．

総会プログラム誌の挨拶文において会長は要約して次のように述べられている．「欧米のみならずアジアにおいてもかなりの数の心肝移植が行われ，欧米諸国では治療体系の中で臓器移植が必要不可欠な治療法と位置づけられているにもかかわらず，日本においてはその部分のみ欠落した治療体系を持たざるを得ないできた．

臓器移植法成立に向けて永年多くの努力がなされ，1997年10月から法が施行されてきた．しかし，この法律はドナー本人が脳死の容認と臓器提供の二つを文書で承諾していることが必要であり，予想される臓器提供についての難しさから，多くの患者の期待に応えることができるのかについて，問題を抱えている．

とにかくわが国は30年にわたる脳死と臓器移植問題の論争に突破口を開き，日本の医学史に未だない脳死臓器移植医療を新たに開こうとしている．

一つ一つの移植にはそれぞれ人生の重みがありますが，今後日本で定着するために何が必要なのか，その条件を分析し，有意義な学術集会にしたいと考えております．21世紀を迎えるにあたって大きく時代が変革しようとしているこの時期を再確認し，今後日本の移植医療の定着にむけて「何をなすべきか」を追求したいと考えております．」．

このように会長や移植関係者はむろんのこと国民は，新臓器移植法下の脳死移植が今回の学会で必ず報告されるであろうと期待していた．しかし残念ながら期待は裏切られ，次の学会に持ち越されることになった．一方学会の直前に岡山大学で２人のドナーから１人のレシピエントへの生体肺移植が行われ，法施行後最初の肺移植も living donor に頼わざるを得ない世界の現状からかけはなれた日本の状況を浮き彫りにさせた．

さて学会では14シンポジウムに83題，一般演題およびポスターあわせて338題が報告された．またあわせて会期中に同会場で開かれた集会は，日本移植学会教育セミナー「臓器移植手術の実際 II 基礎と臨床：How to do it」，市民公開講座「日本の移植医療の明日を考える」，日本学術会議医療技術開発研究連絡会シンポジウム「臓器移植と人工臓器の現状と今後」，移植遺伝子工学研究会と盛りだくさんなものであった．

今回の学会において会長が打ち出された特色は，１．国際化を目指して，シンポジウムを同時通訳付きの英語で行ったこと．２．国民に十分な理解を得てもらうために，英語でのシンポジウムが多かったこともあったが，マスコミ関係者へその日の学会内容を解説するミーティングを毎日行ったこと．３．臓器移植と人工臓器に橋をかけること．であった．

同時通訳付きではあったが，国外の演者や司会者も交えて行われた英語セッションの７シンポジウムは討論も活発であった．閉会式のご挨拶でも小柳会長は，当初心配していた企画であったが全

*筑波大学臨床医学系外科

Presented by Medical*Online

く危惧することがないほどの結果であり，英会話に弱い日本も変わったとと喜ばれていたほどであった．今後このような形での国際化が根付くことを期待していると述べられ，今年私が会長として開催する第35回総会においても2，3のシンポジウムは英語セッションとすることにした．ただし，今回の印象では同時通訳はなくともよさそうであり費用もかかるのでこれはやめることにしている．

臓器移植と人工臓器は車の両輪であるとしばしば譬えられるが，昔は移植学会と人工臓器学会は同時に開催されていた．会長は両者はやはり密接に関係して進歩してゆくべきものであるとの信念から，両分野の研究者が共に討議しあう2シンポジウムをくまれた．また上記の日本学術会議医療技術開発研究連絡会シンポジウムも行われた．両者が互いの現状と近未来をよく認識しながら研究を行ってゆく必要があるのは当然のことであり，このような企画も今後続けられるべきものである．

ちなみに学会の性格を物語るといわれるシンポジウムを列挙する．「Recent advance in lung transplantation」，「Clinical problems in liver transplantation」，「Current status of heart transplantation: Indication, pre-postoperative care」，「Kidney transplantation for high risk donor and recipient」，「Recent strategy in pancreas and kidney transplantation」，「Chronic rejection-Mechanism and treatment-」，「免疫寛容の誘導と維持における最先端（1）（2）」，「Bridge use of artificial organ in transplantation (heart)」，「Bridge use of artificial organ in transplantation(Liver)」，「Organ transplantation in Asia」，「Multiple organ donation における課題と対策」，「組織移植の現状」，「多臓器移植ネットワークの役割と展望」

さて国際化を目指した今回の学会だけに参加された海外の研究者は数多かった．招請講演としては以下が行われた．TE Egan: Cadavers as lung donors: Experience with experimenntal models. PJ Neuhaus: Liver transplantation in hepatitis-C associated cirrhosis. JA Kobashigawa: Postoperative managemant following heart transplantation. Y Iwaki: Impact of race on organ donation: A 4-year study. TE Starzl: Antigen migration and localization governs both immunity and tolerance. Kormos RL: Tailored therapy for cardiac replacement. G Rosenberg: Development and testing of permanent circulatory support systems at Penn State. PW Ramwell: Putative cytoprotective effects of estrogen. DKC Cooper: Xenotrasplantation-Current status. ML Foegh: Molecular mechnisms of chronic rejection: MHC class-II and IGF-I.

またシンポジウム「Organ transplantation in Asia」では基礎的演題に4名，臨床的演題に1名のアジアからのForum paper，招請演題としてシンガポール，韓国，台湾，日本の移植の現状が報告された．脳死の法的整備が急がれている韓国でもすでに313名の脳死ドナーがあり，心移植109例，肝移植（生体肝移植34例，死体肝移植36例）が行われた．なお韓国では生体腎移植において110例のドナー交換移植（同一家族内でドナーとレシピエントの血液型が合わない時に血液型のあう異なる家族間移植する）が行われていることが目立った．ここでも，脳死臓器移植の法律が整備されて1年経っても1例の脳死移植が行われない日本の特異性が論議された．

各会場が比較的こぢんまりとしていて内容ばかりでなく空間的にも密度の濃い学会であったが，閉会式において小柳会長は，「この学会でわが国の脳死移植の報告が行われなかったことは残念ではあるが日本は決して停滞しているわけではない．臓器移植法が施行され，臓器移植ネットワークや医療側の準備も整えられて日本も確実に前に進んでいることが実感できている．今後とも患者さんのために努力して行こう」と最後を結ばれた．

Presented by Medical*Online